ながみ けいこ 【一宮町長賞】 名上 敬子

「お父さん。」

私はあの日から、何度この言葉を力なく空に放ったことでしょう。

どんなときも無条件で褒めてくれる人がいない寂しさ。

私が「寂しい」と一番伝えたい人は、もうこの世にはいません。

突然の癌の告知。予後3か月。

私に何ができるの?あの日から泣くことをやめた私。

あなたの身体から音が消えた瞬間でさえ、涙が出ることはありませんでした。

泣きたいときに泣けないつらさ。あなたにどうしても会いたくて、

家中を探してみても見つけることはできません。終わりのない鬼ごっこみたい。

玄関の姿見の前に立ち、じっと見つめていた姿が今でも忘れられません。

こけた頬、枯れ枝のような腕、だぶだぶのズボン。

自分の命の期限を一番知りたかったはずのあなたは、

最後まであなたなりの優しさで私たちに問うことはありませんでした。

真夜中にあなたの目の前に蠢(うごめ)く百鬼夜行の妖怪たち。

「せん妄」とも家族みんなで闘いました。あの頃は、夜明けが待ち遠しかった。

そして、未だに私の中の体内時計はきちんと1時間おきに

目覚めるようになっているのです。

あなたがいなくなって半年も経つというのに……。

でも、大好きな家であなたを看取ることができて本当によかった。

あなたが身をもって教えてくれた「絆」は、遺された私たち家族を今もしっかり 繋いでいます。だから、心配しないで。「お父さん。」この大切な言葉を支えに、 私はあなたの分までしっかり生きていきます。

入賞者の作品への大切な想い…

自宅で父を看取った私たち家族に悔いはありません。

しかし、日が経つにつれ、私の選択は果たして正しかったのだろうかと 疑問に思うようになりました。

思い出をたどり、何も知らされず逝った父に問うことで、答えが見つかるのでは ないかと思いながら書きました。